

ルノワール作『舟遊びをする人たちの昼食』の鑑賞—ワトー作『野外での集い』との対比
を通じて—

立原慶一

本題材実践で生徒間に顕著な能力差が現れたのは、ルノワール作『舟遊びをする人たちの昼食』と、ワトー作『野外での集い』の二作品をめぐって掲げられるべき、対比項目の数と質においてである。生徒はこれら造形表現の内容面と形式面における対比項目を多様に案出した。それは2014年6月に中学2年生4クラス、154名によってなされた。

第一に、対比項目の多様な案出は、彼らにおける鑑賞体験の充実度と能力的特徴を示すもの、と見なせよう。第二に、両作品の比較鑑賞において対比項目を際立たせたのが、とりわけ情趣・画風と描写・彩色法の両局面である。それらのうち質的に見て的確だと判定されるものを第一義的なもの、そのレベルに達しないのを第二義的なものと定義する。

本稿では対比項目を案出する能力が、本研究の定義してきた鑑賞能力を基準として分析される。鑑賞能力は彼らがワークシートにおいて、美的特性（学習指導要領では「よさや美しさ」と記されている）を形容語で述語づけた箇所をカウントすることによって序列化される。中学2年生による対比鑑賞行為の実態を考察の中心に据え、本題材で彼らが発揮した鑑賞能力の特質を究明することにする。小論は本題材における鑑賞体験及び能力論の試みである。

高位（美的特性5回感受組、同4回組）、中位（3回組、2回組）、低位グループ（1回組、0回組）という大枠からなる三類型を基準に、各回数感受組における鑑賞体験及び能力の特質を分析し、検討した。比較鑑賞法は美的特性の5回感受組に対して、対比項目として情趣・画風的特質の感受ではなく、印象派・非印象派的造形性の解釈へと前者の2倍も生徒を多く動機づけた。その事態から高位グループにあって、ワトー作品との対比鑑賞行為が印象派をめぐる表現方法に対する関心を、喚起した様子が窺われる。それは彼らにおける鑑賞体験の特徴と見なせよう。

4回感受組になると、情趣・画風的特質の感受者が徐々に台頭し始め、比較鑑賞は感受と解釈の双方に同程度の関心を抱かせるようになる。彼らにとっては、ワトーの作品を参考として見据えることの表現方法論的な意義と、効果が薄れたといえよう。4回感受組は高位グループに、3回感受組は中位グループに形式的に分けられたが、第一義的な対比項目を見極める鑑賞能力の点で、両者には実質的に大きな断絶が認められた。ということは5回感受組と4回感受組を合わせた高位グループの85名55.2%、すなわち全体の過半数以上の生徒が本題材で、質の高い鑑賞体験を成就し能力を発揮しえたことになる。これを根拠として本題材の教育的有効性が裏付けられた。

4回感受組と3回感受組において、情趣・画風的特質の感受と描写・彩色法的特質の解釈をめぐって、対比項目のほぼ同数がそれぞれ案出された。それは彼らにおける鑑賞体験の特徴と見なせよう。2回感受組では、3回感受組に比べて対比項目として情趣・画風的特質感受の傾向がこれまでと異なり、描写・彩色法的特質の解釈である場合の5倍も多く

なる。それが彼らの鑑賞体験における特徴であり、情趣・画風的特質への関心の高まりが見て取れる。そのような趨勢は低位グループにあって、逆に印象派・非印象派的造形法に対する関心のなさを窺わせていよう。

1回感受組において第一義的、第二義的を問わず、情趣・画風的特質や描写・彩色法的特質に関して、対応関係を案出できた生徒は皆無であった。0回感受組において、対比項目として第二義的なモチーフ・情景的特徴を把握した生徒は、わずかに2名に留まった。低位グループのいずれの組も、れっきとした対比項目を案出するには、能力的に遠く及ばなかったのだろう。低位グループにおける、鑑賞体験及び能力の実態がここに端的な形で現れたものと思われる。

高位グループは対比項目という切り口から情趣・画風的特質の感受をより豊かに行い、併せて表現方法的特質の解釈を的確に成し遂げた。こうした実践結果に着眼するならば、本研究で定義する鑑賞能力の意義深さが判明する。この能力は本研究が成立するための端緒であるとともに基盤であって来たが、小論でその枢要性が改めて確かめられる形となった。美的特性の感受回数が多いとされた生徒が充実した鑑賞体験をしたことを思えば、多くの授業場面で美的特性を数多く（高回）感受させるというルーティンワークの重大さ、またそれへ導く指導の大切さが浮き彫りにされた。